

もずとすぎの木

小川未明

青空文庫

若い元氣なもすが、風の中をすずめを追いかけてきました。すずめは、死にもの狂いに飛んで、すいと黒くしげったかしの木のなかへ下りると、もずはついにその姿を見失ってしまったので、そばの高いすぎの木の頂に下りて止まりました。

「ああ、ばかな骨おり損をしてしまった。」といつて、いまいましように、もずは、くちばしを木の枝でふいていました。

これを聞いたすぎの木は、

「いいことをなさいましたよ。」といいました。もずは、目を光らして、

「私は仕損じてがっかりしているのに、なんでいいことをしたと

いうのですか？」と、すぎの木きに向むかつて、たずねたのです。

「あのすずめの母ははおや親おやは、病びよう氣きなんですよ。そしてあの子こすず

めは、感かん心しんな親おや思おもいで、きつと母ははに食たべさせる餌えをさがしに

出でかけたのでしよう。あのすずめが、あなたに捕つかまったら、病びよう

氣きの母ははすずめは、悲かなしくて死しんでしまふにちがいありません。」

と、すぎの木きは、答こたえたのでした。

これをきくと、もずは、はじめて、そんな感かん心しんな子こすずめで

あつたのかと思おもいました。

「そうですか、それは、いいことをした。もうすこしで私わたしのつめ

は、あの子こすずめの体からだにさわたつたのだ。いまごろどんなに驚おどろいて

いることだろう。まだ、私わたしが、ねらっていると思おもうだろうから、

私は、そんなことを忘れてしまったと知らせるために、唄をうた
つてやりましょう。」

若い、元気なもずは、すぎの木の頂で、風に吹かれながら、青
空に向かつて、高い、そして鋭い声で、おもしろそうな唄をう
たつたのであります。その声は、遠くまでひびいたのでした。

「ごらんなさい。いままで、方々にきこえていた小鳥たちの声
が、あなたの声をきくとぴたりと止まって、静かになったじや
ありませんか、みんなあなたを怖れているのです。」と、すぎの
木は、いいました。

このとき、木の下の方で、人の声がしました。もずが見ると、
かきの木があつて、赤い実がたくさんなっていました。そのそば

に、一軒^{けん}のわら家^やがあつて、六つばかりの女^{おんな}の子^こが、

「あの鳥^{とり}は、なんという鳥^{とり}なの？」といつて、おじいさんに、きいていました。おじいさんは、眼鏡^{めがね}をかけて、日^ひの当^あたる縁^{えん}側^{がわ}でご本^{ほん}を見ていられましたが、

「あれは、もずという小鳥^{ことり}だよ。あの鳥^{とり}は、秋^{あき}になると、飛^とんできて、高^{たか}い木^きに止^とまつて鳴^なくのだよ。」と、おつしやいました。

女^{おんな}の子^こは、じつと木^きの頂^{いただき}を見ていましたが、

「私^{わたし}は、あの鳥^{とり}が大好き^{だいす}よ。また来^{らい}年^{ねん}も、あの木^きへきて鳴^なくといいわね。」といつて、ながめていました。

もずは、これまで自分^{じぶん}をいやな鳥^{とり}だとか、乱暴^{らんぼう}な鳥^{とり}だとか、いううわさをきいていましたが、いま、このかわいらしい女^{おんな}の子^こ

に、好きといわれたので、たいそう機嫌をよくしました。

「すぎの木さん、ここの景色はすばらしいじゃありませんか？

私は、きつとまた来年もやってきますよ。」といいました。

「もずさん、来年といえは、長い間ですが、諸国を飛びまわ

るあなたは、どうぞ体にお気をつけなさい。」と、すぎの木は、

旅をつづける小鳥の身の上を心配していったのです。

「ありがとうございます。あなたの身の上にもしあわせのあるよ

うに祈っています。」といって、もずは、青空を飛んで、どこ

へか姿を消してしまいました。

いつしか、冬がきて、また春となり、夏が過ぎて、とうとう約

束の翌年の秋がめぐってきました。もずは、山から山へ旅を

つづけているうちに、ふと去年きよねんのことを思い出おもしました。

「あのすぎの木きは、どうなつたろう？」

そう思うおもと、つぎからつぎと去年きよねんのことが思い出おもされて、なつかしくなりました。もずは、野原のはらを越こして、山やまを越こして、見覚みおぼえのある村むらへと飛とんできました。あちらに川かわがあつて、きらきらと金色きんいろの日の光ひかりに輝かがやいていました。

「去年きよねんも、あの川かわを越こしたのだな。」と、もずは、思おもいました。やがて高いたかすぎの木きが、目めに入はいりました。つづいて赤あかいかきの木きが目めに入はいりました。そのそばにわら家やがあつて、すべてが去きよ年のまねまの景色けしきでありました。

もずは、一ひとこ声え高たかく鳴ないて、すぎの木きの頂いたに止とまりました。

「ご機嫌きげんよう、すぎの木さん。」

「おお、去年きょねんいらしたもずさんですか。」

もずが朗ほがらかに鳴なくと、かしの木きのしげみの中なかですずめは、耳みみを傾かたむけて、

「みんなここへおいで、私わたしを追おいかけたもずがきましたよ。けっして、この木きから外そとへ出でてはいけません。」と、いつしか、親おやす

ずめとなったすずめが、子こすずめたちにいいきかせていました。

また、下したの家いえでは、

「おじいさん、もずがきましたよ、きっと去年きょねんのもずですね。」

と、女おんなの子こがいつていました。女おんなの子こは、お友ともだちと縁えん側がわで、

お人にんぎよう形だを出だして遊あそんでいました。

「ああ、みんな私わたしを覚えていてくれて、こんなうれしいことはない。」と、もずは喜びよろこました。

「すぎの木さん、また来年らいねんもやってきますよ。」と、やがてもずは、すぎの木きに別れわかを告つげて、飛とんでゆきました。

三年ねんめの秋あきが、めぐつてきたときに、もずはもう年としをとつていました。しかし、もう一度どあのすぎの木きや、子供こどもを見みたいと思おもいました。彼かれは、野原のはらを越こえ、山やまを越こえてくると、光ひかった川かわがいつものごとく目めに入はいりました。けれど、どうしたにか、なつかしいすぎの木きや、赤い実あかみのなつたかききの木をさがしましたけれど、どこにもそれらの姿すがたが見えませんでした。そしてそこには新あたらしい工場こうじようが建たち、高たかい煙突えんとつから黒い煙けむりが流ながれていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

初出：「台湾日日新報」

1937（昭和12）年4月16日

※表題は底本では、「もずとすぎの木《き》」となっています。

※初出時の表題は「百舌と杉の木」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

もずとすぎの木

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>